法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-01

竹永進編訳『ルービンと批判者たち ： 原典資料20年代ソ連の価値論論争』

HARA, Nobuko / 原, 伸子

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
The Hosei University Economic Review / 経済志林
(巻 / Volume)
68
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
319
(終了ページ / End Page)
332
(発行年 / Year)
2000-11-30

《書　評》

竹永　進編訳
『ルービンと批判者たち
―― 原典資料20年代ソ連の価値論論争』
（情況出版，1997年）

原　　伸子

Ⅰ．はじめに――70年代欧米価値論論争とルービン

1990年代に入り，欧米では，70年代当時の価値論論争を総括し新たな理論的地平を切り拓こうとする試みが見られるようになった[1]。論争の当事者であり，主たる論客であったS. モーハン編集の『価値論論争』（1994年）は，1973年から1991年までに，『社会主義経済学会』（CSE）の *Bulletin* と，*Capital and Class* に発表された，いくつかの主要な論文および，現時点における各論者の「後書き」を収録したものである。本書は，1970年代の活気ある論争の経緯と，現時点での各論者の回顧を同時に伝えることにより，まさに価値論論争とは何であったのかをあらためて問い返す最良の文献となっている[2]。

ここで注目されるのは，その冒頭に，И.И. ルービンの論文「マルクス体系における抽象的労働と価値」（1927年）が収録されていることである。これは，旧西ドイツで1975年に出版された，ルービン，ベソノフ他『諸範疇の弁証法：ソ連における論争（1927～29）』から英訳され，1978年に，*Capital and Class* 誌上に公表されたものである。周知のようにこの論文

は，1973年に公刊された，英訳版の『マルクス価値論概説』（第3版，1928年）の主要論点を先取りする形で，その内容をさらに鮮明に展開したものであり，1970年代，活発な議論が展開された欧米価値論論争に対して，絶大な影響力を与えることになったのである。

ところでわが国では，ルービンの論文「抽象的労働と価値」の日本語訳は非常に早い時期に紹介されていた。その日本語訳は，まさにソ連で価値論論争が華やかに展開されていた20年代後半，すでに河野重弘訳『マルクス経済学の根本問題』（1929年）の中に収録されている。その後，いくつかの先駆的業績[3]が展開されるとともに，欧米価値論論争も精力的に紹介されることになった。けれども，ルービン価値論自体は「なぜか本格的には議論されてこなかったように思われる」[4]。

ルービンの一連の論文が公表されたネップ期のソヴィエト・ロシアにおいて，社会的分業関係における労働の通約の問題と，資本主義社会における価値形態，すなわち抽象的労働の形態との関連を問うという課題は，政治的に最大限の重要性をもつものであった。なぜなら，A.Φ. コーンのように，抽象的労働を価値の実体，すなわち一定量の生理学的エネルギーの支出というように「超歴史的性格を有する範疇」とみなすか，あるいはルービンのように，抽象的労働を資本主義社会に独特な関係概念とみなすかによって，社会的な価値の量的可測性が可能か否かという現実的問題が直ちに生じるからであった。まさに，『価値論概説』の第2版（1924年）刊行後，ルービンが批判にさらされたテーマの一つがこの「価値の量的可測性」の問題だったのである。

ネップから一般路線への政策転換のもと，ルービンのいう，社会主義のもとでの「価値法則」の適用可能性にたいする疑問や，マルクス価値概念にかんする批判的検討は，外国の思想（とくに第2インター系のオーストリア・マルクス主義者の『資本論』理解）にかぶれた，社会主義建設を妨害するものとして，次第に，当局にとって絶えがたいものになっていったのである。スターリンによる粛清によって消息を絶つことになった，この

悲劇の経済学者ルービンの理論が，まさに，1970年代の欧米価値論論争によって甦ることになったといえるのである[5]。

1980年代，論争は，CSEの外で継続されることになったのであるが，この価値論論争，とりわけ，ルービンの影響を受けた「抽象的労働論」は，現時点でいかなる方向に向かっているのであろうか。

以下，竹永進編訳『ルービンと批判者たち――原典資料20年代ソ連の価値論論争』の検討を通して，ルービン価値論の可能性とその理論的射程について考えてみることにしたい。

Ⅱ．本書の概観

訳者はすでに，本書刊行に先だって，1993年に，ルービンの『マルクス価値論概説』（第4版1930年，以下，引用にさいしては『概説』と略記する）の翻訳を上梓されている。訳者は，『概説』の翻訳にさいして，20年代のソ連の価値論論争に直接・間接にかかわる膨大な資料を調査され，詳細かつ丁寧な「訳者解説」を書かれているのであるが，そこで未入手であった資料のうち，後に発見・入手されたものが，今回，ここで取り上げられている。したがって本書はまず，『概説』への「付属資料的性格」をもっている（『ルービンと批判者たち　原典資料20年代ソ連の価値論論争』5ページ。以下，本書からの引用はページ数のみを示す）。

本書に収録されているのは，『概説』「第2版」（1924年）の第12章「価値と交換価値（価値の内容と形態）」と第14章「抽象的労働」，および，当時の論争に参加したルービン派と反ルービン派の論文のいくつかである。『概説』「第2版」の第12章は，『概説』第3版の改訂にさいして，「全面的に書きなおし」がおこなわれた個所であり，また第14章は「大幅に拡大」（以上，『概説』，iiiページ）された個所である。ルービン自身が述べているように，第3版の刊行および改訂・増補の基本的的動機が，第2版刊行後4年のあいだにおこったルービンの抽象的労働の定義をめぐる論争

であったことを考えれば，この「書きなおし」と「拡大」を第2版と第3版との比較によって検討することは，ルービンの抽象的労働論理解にとって，きわめて重要な意味をもっている。

『概説』以外の収録論文名は次のとおりである。И. ダシコフスキー「マルクスの抽象的労働と経済的範疇」(1926年)，M. サイグーシュキン「唯物論的範疇としての抽象的労働」(1929年)，E. ランジェ「機械論的方法と価値論の基礎付け」(1929年)，З. ヴェルニル「機械論者たちとの闘争の外見の下に，いかにルービンの見解の体系がまかり通っているか」(1929年)。このうちダシコフスキー論文は「論争の事実上の火付け役」(250ページ）であり，『概説』「第3版」に付された「付録Ⅱ　批判者たちへの回答」の中で，ルービンによって詳しく検討されている。それに対して，サイグーシュキンおよび，ランジェとヴェルニルは，コーンやベソノフのように「論争の表舞台で「立役者」として活躍した論客」ではなかったこともあり，これまで，十分にとりあげられることがなかったものである。本書において，サイグーシュキンは「29年の段階での反ルービン派の水準を代表するもののひとつ」(249ページ）として，また，ランジェとヴェルニルは，それぞれルービン派と反ルービン派の立場から「論争の論点を整理して問題点の理解に大きく寄与」(250ページ）するものとして，高く評価されている。編訳者は，20年代ソ連の価値論論争について，「可能な限り原資料を渉猟して調査してみよう」(233ページ）という意図のもと，これまで未入手だった膨大な文献を紹介・検討され，そしてその結果，いわば舞台裏の影に隠れた部分に光をあてられている。このような作業によってわれわれは，当時の論争の生き生きとした姿をより正確に知ることができるようになったのであり，本書の重要な意義の一つもここにあると考えられる。

ところで本書には，以上の収録論文の他に，「編訳者解説」として，「イ・イ・ルービン『マルクス価値論概説』第2版から第3版への改訂について—20年代ソ連の価値論論争のひとこまと第3版における抽象的労働論—」

と「20年代ソ連の価値論論争についての資料紹介」という2つの論文が掲載されている。前者については，後に触れることになるので，ここでは後者の資料紹介について述べることにしよう。

前述のように，訳者はすでに，ルービンの『価値論概説』第4版にもとづく邦訳を刊行されている。そのときに「未入手」あるいは「入手可能かどうかの見通しも立たなかった」(以上，233ページ）資料を，今回（1995年）入手することできるようになり，ここに紹介されているのであるが，「いずれも20年代の政治弾圧の直接・間接の対象となった書物であり，旧ソ連時代にはこうした形で外国研究者が入手繙読することはおそらく考えられなかった」(233ページ）文献である。ここでは，以下の4つの文献が取り上げられている。

1. И.И. ルービンとШ. ドゥヴォライツキー編集のドイツ語論文集である『政治経済学の基本問題』(1922年)
2. И.И. ルービン『マルクス価値論概説』(初版，1923年)
3. Б. バリーリン，A. レオンチェフ編『政治経済学における機械論的傾向に反対して』(1929年)
4. C.A. ベソノフ，A.Φ. コーン編『ルービン主義がマルクス主義か』(1930年)

見られるように，ここで非常に興味を惹かれるのは，この4つの文献が，まさに20年代，ロシアにおけるルービンの抽象的労働論をめぐる論争の流れを，年代順に表していることである。文献〔2〕については，次のⅢ.の項目でふれることになるので，その他の三つの文献で注目される点を簡単に述べることにする。

文献〔1〕はルービン価値論の理論的バックグラウンドの理解にとって大変重要である。ルービンは一方で，マルクスの「経済学批判序説」を最重要視するとともに，他方で，バウアー，エクシュタイン，ヒルファディング，クーノー等の第2インター系統のオーストリア・マルクス主義者達の『資本論』理解を積極的に紹介している。後者は，「この時代すでにレー

ニンによって「背教者」「裏切り者」「修正主義者」の烙印を押されていた理論的政治的指導メンバーによる論文」(237 ページ) である。ロシアのマルクス主義文献 (ブハーリンのドイツ語論文をのぞいて) については一言も言及がなく,「特に, レーニンの経済学上の文献については何も語られてない」(238 ページ)。以上のことは, それ自体, 20 年代ソ連がまだ学問的に活気に満ち, 自由な雰囲気に溢れていたことを示すものではあるが, 後に, この論文集は, ルービンの価値論の方法が,「新カント主義的観念論」と呼ばれる原因にもなった, と言われている。(238 ページ) 〔3〕 はこうした状況のなかで「ルービンを支持する側にあった論者達による論文」(242 ページ) 集である。また文献 〔4〕 は反ルービン派の立場から書かれており「論争弾圧の合図ともなった論集」(245 ページ) である。そこでは, ルービン価値論に対する理論闘争は, 国内の階級闘争の重要な部分に位置付けられていたのであり,「事実, ルービンたちの動きはこの論集の刊行に前後して下降局面に入った」(248 ページ) といわれている。

Ⅲ. 本書の理論的意義——ルービン抽象的労働論の学説史的検討

上述のように, 1920 年代ソ連の経済学界では, ルービンによる抽象的労働の定義をめぐって, ルービン派と反ルービン派との間で激しい論争が展開された。理論的に重要になってくるのは,『概説』第 2 版 (1924 年) 刊行後の抽象的労働の定義をめぐる論争をうけて, ルービンが,『概説』第 3 版 (1928 年) において, どのような改訂をおこなったのかである。

編訳者は本書の意義を以下の 2 点に整理されている。第 1 は, ルービンの抽象的労働論の意義を, 形成史的アプローチによって検討することから生じるという観点である。すなわち,『概説』「第 2 版」(1924 年) のうち「第 3 版」(1928 年) との相違がもっとも顕著である第 12 章「価値と交換価値 (価値の内容と形態)」と第 14 章「抽象的労働」の両章を, 第 3 版の対応諸章との関連において考察することによって,「第 3 版」において最

終的に結実したルービンの抽象的労働論の独自性（および問題点）とその成立過程における論文「マルクス体系における抽象的労働と価値」（1927年）の意義を一層明らかにすることができる，ということである（205ページ）。後に述べるように，ここでは，ルービンの抽象的労働論精緻化の過程における，学説史的経緯（リカード・ベイリー問題）の意味が問われることになる。第2は，第1の意義を明らかにするさいの方法に関わるものである。すなわち，「抽象的労働論の特質を解明するためには，まず論敵たちの議論をルービン自身の『概説』での批判的要約によるのではなく直接彼らの書いたものによって確認し，これを「批判者たちへの回答」としての『概説』「第3版」の改定・加筆個所と対比してみることが必要」（205ページ）であり，本書収録の諸論文の意義もそこにある，とされている。（ついでに言えば，この観点は，『剰余価値学説史』（「1861～63年草稿」の23冊のノートの一部）におけるマルクスの経済学批判の方法を，学説史の方法という観点からいかに評価するのか，という古くからの問題にも関わるものであろう。）

それでは，以上のアプローチによって，何が理論的に重要になってくるのであろうか。以下，まず編訳者による論点を整理してみよう。

まず第12章は，「第2版」では，「価値と交換価値（価値の内容と形態）」という表題であったが，「第3版」では，副題がメインタイトルに格上げされて「価値の内容と形態」となっており，「価値と交換価値」が消えている。編訳者によれば，「この表題の変更はそのままこの章の内容の改変を表している」（210ページ）。すなわちそれは，周知の『資本論』冒頭章における前半と後半の二つの構成部分の関係をいかに理解するのかという問題である。前半（価値実体論）は第2節末尾の文言に典型的に見られるように，価値の生理学的解釈に根拠を与えるものであり，後半（価値形態論と呪物性論）は価値を形態としてとらえるものである。ルービンは，「第2版」では，「外形上の矛盾」，そして，生理学的解釈を徹底して批判しているのに対して，「第3版」では，前半と後半の二つの構成部分の関

係を何とか首尾一貫して解釈し，この外形的矛盾の「よってきたる所以」(210 ページ）を示そうとしている。そして，こうしたスタンスの変化を可能にしたのは，「第 2 版刊行後の経済学史研究の成果」，とりわけ「ベイリーのリカード批判の発見」(212 ページ）にもとづいている，と。

すなわち，そのような「実体主義的偏り」は，ベイリー批判の観点に結びつけられている。すなわち，「価値を諸商品の個別・具体的な交換割合としての交換価値に解消するのみで交換割合の規制者の存在をまったく認めないベイリーの徹底的な名目主義的・相対主義的価値論に対抗して，個別・具体的な交換割合とは次元を異にする価値の存在をまず強く打ち出しておくという戦略的な配慮からだという」(213 ページ）ことになる。いわゆる「蒸留法」という価値実体の導出手続きの方法に対して，それを，「戦略的」「暫定的」な観点からなされたものであるという意義付けは注目すべきものであろう。

次に第 14 章について。『概説』第 3 版への序文でルービン自身が述べているように，この章は「生理学的労働，抽象的労働と交換，抽象的労働の量的規定性，にかんする諸問題について」「大幅に拡大」(『概説』 iii ページ）されており，「第 2 版の 2 倍弱の分量」(215 ページ）となっている。理論的に重要になってくるのは，次の 3 つの論点である。

第 1 は，「3 種類の同等な労働」(①「生理学的に等しい労働」，②「社会的に同等化された労働」，③「抽象的ないし抽象的に一般的な労働」）という概念的枠組の導入である（『概説』130 ページ)。これはルービンが，ダシコフスキーによる批判をうけて，自らの抽象的労働概念をより一層厳密化するために導入したものである。ルービンは，①と③の労働の混同だけではなく，②と③の労働の混同をも批判する。すなわち，「社会的に同等化された労働」が抽象的労働と認められるためには，2 つの条件が必要である。まず，異なる私的労働が「同等化されることによって社会化される」(217 ページ）ことであり，次に，「この同等化が物象的形態（商品交換）を通じて実現される」(同)，すなわち「労働生産物の価値性格の形態」

(『概説』131 ページ) で生じることである。

第 2 の論点は，第 3 版では，「交換の 2 つの概念」(223 ページ) すなわち「生産の社会的形態」としての交換と，「個別的局面」としての交換という，あらたな枠組が提起されたことである。これは，第 2 版における生産と交換の対立的把握，あるいは「交換主義」的文言にたいするシャブスの批判をうけたものである。ルービンは，ここで，再生産の視点を全面にだすことによって，労働の抽象化と価値の発生が問題とされるのは，「生産の社会的形態」としての交換においてであるとする。編訳者は，以上見られるよう概念が，生理学派の各論者，ダシコフスキー，シャブスそしてコーン等の批判をうけて提起されてきた経緯を詳しく紹介している。このような論述は，編訳者の作業に見られるように，まさに論争の厖大な原典資料に直接あたることによって，初めて説得力をもつことになるであろう。

さらに第 3 の論点として挙げられているのは，価値の量的規定性の問題についてである。これは，生産の「物的・技術的」過程と「抽象的労働の量」との関係をいかに理解するのかということであり，第 2 の生産と交換の関係にかんする問題と密接に関連している。「ルービンの抽象的労働論において価値の量的規定は説明可能なのかという批判は，第 2 版刊行後にヴァズネセンスキー，シャブス，コーンがこぞって」(227 ページ) 批判していた。ルービンは，「第 3 版」において，次のように説明する。「労働生産性の発展は，実際に生産に平均的に支出される具体的労働の量の減少に表現される。また，このことによって，—具体的労働と抽象的労働という労働の二重性格のゆえに—「社会的」ないし「抽象的」労働つまり社会の均質な総労働の分割分として考察される労働の量が減少する。労働生産性の発展は，生産に必要な抽象的労働の量を変化させ，労働生産物の価値の変化を引き起こす」(『概説』63 ページ)，と。編訳者はここで，この「労働の二重性格」は，「一種の切り札」(230 ページ) として用いられており，また「この文脈のなかで唐突に持ち出されているという印象を免れない」，そしてこの概念によってルービンは，「肝心の説明の困難をすり抜

けているように思われる」(230 ページ) とされている。

以上が編訳者による論点整理である。ここで評者によるいくつかのコメントを述べてみたい。

第 1 は，本書は，1920 年代ソ連の価値論論争の膨大な原典資料を比較・検討することによって，まさにルービンが論争のなかで，価値の内容と形態，交換価値と価値とのあいだで腐心しつづける姿を浮き彫りにすることができたということである。けれどもそこで，ルービンは，抽象的労働をあくまで社会的な形態規定として主張しつづけており，新しい理論的枠組の提起・模索も，それを，どうにか説得的なものにしようとする意図にもとづいていた。そして，この過程で最も重要になるのは，「リカード・ベイリー問題」であった，ということである。このような論点は，本書においてとられている形成史的アプローチによってより鮮明になってくる。蒸留法による価値実体論にたいするルービンの評価も，編訳者によれば，ベイリーを意識した「戦略的」なものだったということになる。このような意味付けは，評者もまたまさに編訳者が言われるように，「日本における戦前以来のマルクス価値論論争史に照らしてみても」(213 ページ)，重要な意味を持っているのではないかと思われる。

第 2 は，ルービン価値論における物象化論の評価に関してである。『概説』と『資本論』とを比較した場合に，前者の最も大きな特徴をなすのは，体系の冒頭（したがって価値論の冒頭）に，物象化論が置かれていることである。『概説』第 2 版と第 3 版との対比という問題設定のもとでは，あまり明確にならないのだけれども，編訳者も検討されているように（241 ページ)，『資本論』と対比することによって，ルービン価値論にしめる物象化論の重要性がより鮮明になってくると思われる。ルービンにとって，マルクス価値論の物象化論的基礎づけという問題は，当初より，最重要なものであり，第 2 版では，2 つの章（「生産関係の物象化」と「物象と社会的機能（形態)」）が，第 3 版では，さらに 1 つの章（「人間間の生産関係の物象化と物象の人格化」）が付け加えられている。したがって，編訳

者が，『概説』第3版第14章の検討のさいに明らかになった「交換の2つの概念」，すなわち，生産と交換を再生産の視角から把握するという観点を，一方で，「ルービンの物象化論と発想の型において同根」（226ページ）といわれながら，他方で，「第2版にはまったく見られなかった」（225ページ）特徴付けであり，「ある意味ではシャブスの議論に負うものである」（226ページ）とされるとき，評者には，ルービン価値論にしめる物象化論の過少評価につながっているように思われるのである。

ルービン自身，物象化論を「マルクスの経済学体系全体とりわけ彼の価値論の基礎」（『概説』6ページ）と位置づけている。したがって『概説』の課題は，「物が極度に重要な特別な社会的役割を演じ特別の社会的属性を獲得する…商品経済の構造の作用」（『概説』7ページ）を明らかにすることにあったのである。この物象化論については，たしかに，訳者も指摘されているように，1920年代の価値論論争においても，1970年代のそれにおいても中心的課題としてとりあげられることはなかった（『概説』529ページ）。けれども，例えば，カトリーヌ・コリオーテレーヌは，ルービンの『経済思想の歴史』（1926年）英訳版（1979年）「後書き」のなかで，バリバールがマルクスの物象化論を「初期マルクスの哲学的諸問題の特殊なヴァリアント」とする点を批判して，マルクスの価値論と物象化論との連繋の重要性を指摘している（*A History of Economic Thought, p. 439-440, 1979*）。さらに英訳版『価値論概説』の訳者パールマンは長大な「序文」の全体をあてて物象化論を検討している。ルービン価値論の物象化論的側面は，その重要性にもかかわらず1970年代価値論論争に欠落していた部分であり，現時点において正当に評価されるべき視点であると考えられる。

第3は，『概説』第3版において問題とされた，生産の「物的・技術的」過程と「抽象的労働の量」の問題にかんしてである。この問題は，編訳者がいわれるように，「難問」（230ページ）であり，ルービンの腐心のあとが窺える。また，「労働の二重性格」という概念を媒介にした論述は，「第

3版」において初めてみられるものである。ここから編訳者は，このテーマが「この文脈のなかで唐突に持ち出されているという印象を免れない」(229ページ）とされる。けれども，評者によれば，そこでの基本的論理は，すでに，第2版第12章の最後の個所で詳細に検討されている問題，すなわち価値の「質的側面と量的側面」，交換価値の「質的側面と量的側面」(24-28ページ）の叙述における問題意識につながるのではないだろうか（ちなみに，この第2版末尾の論述は，「第2版に特有な問題」(214ページ）と位置付けられている)。

全体として，編訳者は，「第2版」から「第3版」への理論的発展関係（および，そこからくる叙述の外観上の相異）の考察にさいして，理論的継続性よりも，両者の違いを最重視されているようである。これは，おそらく，理論の発展過程における「リカード・ベイリー問題」の重要性を際立たせようとする編訳者の意図から来ているようである。だが評者には，両者の理論的一貫性の部分も，もう少し重視されてもよかったのではないかと思われる。少し気にかかる点である。

Ⅳ. おわりに——ルービン価値論の再検討のために

以上見られるように，本書によって，われわれは，まさに1920年代ソ連の価値論論争の渦中に身を置くことができるのである。ルービン派と称される人々，反ルービン派と称される人々の生身の声をじかに聴くことが出来るようである。これは，編訳者による，この論争にかかわる膨大な原典資料の収集・解読という，大変な作業によって初めて可能となったものである。『概説』の翻訳とあわせて，本書の刊行は，まさに「特筆に値する」[(6)]といえよう。

ところで，ここでわれわれにとって重要なのは，今まさに，ルービン価値論を検討することの意義である。1920年代の抽象的労働論争，1970年代の欧米価値論論争におけるルービンの復権，そして現代という流れのな

かで，ルービンの抽象的労働論はどのように位置付けられているのであろうか。

1970年代価値論論争のなかで，ルービンの抽象的労働論の立場にたっていた，S. モーハンは，前掲の『価値論論争』のなかで，1980年代の，G. デュメニやD. フォーリー[7]による，マクロ的な貨幣的価値論の流れをさらに発展させて，「非商品貨幣」をも視野にいれた貨幣論を展開する方向を提起している。だが，その基本的立場は，価値の分析のためには，貨幣の分析が重要であるという「抽象的労働論」に立脚している。ここではあくまで生産と流通との連繋が重視されている。

それに対して，同じく，貨幣的価値論の立場にたちながら，「経済理論の貨幣論的再構成」を目指すという方向が提起されている。そこでは，労働価値論は，「結局流通部面＝市場の意義の縮減をもたらし，あのマルクスの重層性認識の意義を減殺する，認識上の障害」[8]である，とまでいわれている。

このような流れは，ルービンの抽象的労働論の一方の性格を推し進めていった，当然の帰結であるともいえるのであるが，以上みられるような，貨幣論的価値論の2つの流れを，われわれはいかに受け止めていくべきであろうか。1989年のベルリンの壁の崩壊を経て，1990年代モーハンが，いみじくも述べているように，価値論論争は，「ようやく始まったばかりである」[9]と，言うこともできる。そして現時点における問題の発端は，1970年代価値論論争であり，またそこで甦った1920年代ソ連のルービン価値論（そして彼が腐心した「生産」と「流通」の問題）だったのである。そのような流れにおいて，本書はまさに，最重要な文献の一つとなっていくと考えられるのである。

《注》

（1）　家事労働論争も，広義の価値論論争の重要な部分を担っていたと言えるであろう。J. Gardiner は，最近の著書の中で，1980年代以降，マルクス主義フェミニズムの手に移り，イギリス国内では立ち消えとなってしまった家事

労働論争をもう一度総括し，ジェンダーと経済学との関係を問題化するという作業を行っている。Jean Gardiner, *Gender, Care and Economics,* Macmillan press, 1997.

（2） Simon Mohun (edit.), *Debates in Value Theory*, St. Martin's press, 1994.

（3） 例えば，西口直治郎「I. I. ルービンの価値論」『経済学年報』（大阪市大）第38集（1978年），同「マルクス価値論の発生論的方法」『経済学雑誌』（大阪市大）第80巻1号など。

（4） 正木八郎「マルクス商品・貨幣論研究の現段階」『経済学史学会年報』第35号（1997年）125ページ。

（5） 欧米マルクス価値論争については，植村博康「〈労働の還元〉と抽象的労働論」『エコノミア』（横浜国大）第84号，に詳しい。

（6） 前掲正木論文，125ページ。

（7） D. K. Foley, 竹田・原訳『資本論を理解する』法政大学出版局，1990年。

（8） 正木八郎「『二層モデル』とマルクスの資本循環論」『経済学雑誌』第100巻第2号（1999年），5ページ。

（9） S. Mohun, ibid., p. 227.